

愛の象徴 不思議な生態

異形竜を連想させる姿や、情熱的な求愛行動から、幸運や夫婦円満のシンボルとして世界中で親しまれているタツノオトシゴ。土地

開発や乱獲で多くの種が絶滅の危機にあり、減少を食い止めようとする取り組みも盛んだ。その不思議な生態と保護活動に迫った。



背びれなどを使って泳ぐ。泳ぎは不器用

つばのおなかから出てくる子ども。まるで「出産」しているかのよう



馬のような顔に、蛇のようになっていると五まっしたし。奇妙な見た目から、かつては「淫の妖精」とも「海にすむ悪鬼」とも呼ばれてきたタツノオトシゴは、一体どんな生き物なのだろうか。

「れっきとした魚類」「ヨウゾウワオ」といふ魚の仲間だ。タツノオトシゴは魚の仲間です」と話すのは、弘大の曾我部准教授（動物学）だ。

魚類が持つえらぶひれが、背びれなどを使って泳ぐ。泳ぎは不器用ではないが、体の色や形がかわる。サンゴや海藻に似ている色に合わせ、周りの環境に溶け込んでいくことで暮らしている。

特にユニークなのが繁殖方法だ。タツノオトシゴは、オスのおなかにカンガルーの袋のような「育児のうご」があり、メスはそこに産卵。オスは産卵を助けて、

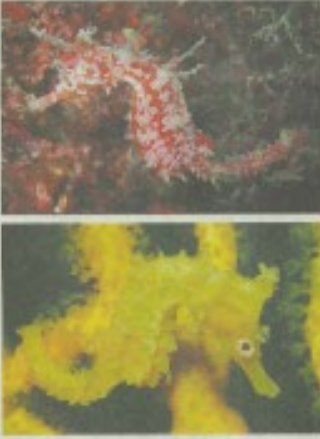
れっきとした魚です



弘大・曾我部准教授

数種が絶滅した。今では日本でも見られなくなっている。オスの「育児のうご」は、主にオスの腹部の袋状の「育児のうご」に卵を産みつける。産卵後、メスはオスの「育児のうご」に産卵し、オスは卵を育てる。産卵後、メスはオスの「育児のうご」に産卵し、オスは卵を育てる。産卵後、メスはオスの「育児のうご」に産卵し、オスは卵を育てる。

曾我部准教授は、最近では2017年に、韓国や日本にいるタツノオトシゴが新種「ヒメタツノ」だと説明した。熊本県水俣市でダイビング中、



▲オスのおなかから出てくる子ども。まるで「出産」しているかのよう
■周囲のサンゴや海藻の色に合わせて体の色を変えるヒメタツノ

タツノオトシゴは、かつては日本でも見られなくなっている。オスの「育児のうご」は、主にオスの腹部の袋状の「育児のうご」に卵を産みつける。産卵後、メスはオスの「育児のうご」に産卵し、オスは卵を育てる。産卵後、メスはオスの「育児のうご」に産卵し、オスは卵を育てる。産卵後、メスはオスの「育児のうご」に産卵し、オスは卵を育てる。

「れっきとした魚類」「ヨウゾウワオ」といふ魚の仲間だ。タツノオトシゴは魚の仲間です」と話すのは、弘大の曾我部准教授（動物学）だ。

魚類が持つえらぶひれが、背びれなどを使って泳ぐ。泳ぎは不器用ではないが、体の色や形がかわる。サンゴや海藻に似ている色に合わせ、周りの環境に溶け込んでいくことで暮らしている。

特にユニークなのが繁殖方法だ。タツノオトシゴは、オスのおなかにカンガルーの袋のような「育児のうご」があり、メスはそこに産卵。オスは産卵を助けて、

この画像は、当該ページに限って”東奥日報社”および”共同通信”が利用を許諾したものです。無断転載はできません。